

特262-124



1200501122360

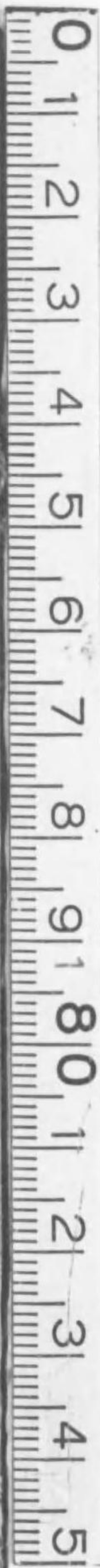
特262

124

中村春雨著

新會社
牧師の家

第八



始



特 262
124

もまア難有く思ひます

兼子「母一人、子一人なもの……又、無事な顔を見せておくれ」

鞠子「それは分りません、唯、貴方と、お父さんの事は一生、忘れはしま

せん……」藤原に、「お父さん……お母さんは私に母の情を見せてくれま

した、貴方も告別に、父として私の云ふ事を聞いて下さる」

藤原牧師「ア、何んでも云ふが善い、何んでも聽いて上げる」

鞠子「今日は一生の告別に、give me a kiss at my lips!」

藤原牧師「lips?!」

鞠子「yes...not at forehead...at my lips.」

(藤原、スット寄つて抱き、接吻する)

柿田老牧師、顔を反け

明治
43. 6. 30
内交

植田老牧師「畜生ぢや……畜生ぢや……もう見てゐられない」と歩き廻る、

鞠子「お父さん、もうこれで私は満足して海の上へ行きます、海の上の女神になれます」

潮金平「ぢやア女神を連れて行きます、併し來年來る時には、存外、乳呑

兒を抱いたお母さんになつてるかも知れません」と笑ふ

(鞠子、反抗的に)

鞠子「私は死ぬまで獨身よ」

潮金平「獨身でも、海の子を産むのなら善いだらう」

鞠子「海の子なら海に流しますわ」

(潮、笑つて)

潮金平「オア何んでも善い、サア行かう」立ち揚る、

鞠子「行きませう」

兼子「氣を付けてお行きよ、新橋まで、堂守の老爺さんが行つて、荷物の

世話をしてくれるやうに云ひ付けてあるんだからね」

藤原牧師「随分、健康に注意するがいよ、出来るなら、音信もしてくれ」

(鞠子、淋しく笑つて黙つてゐる)

潮金平「左様なら！」と藤原夫婦と握手、歩いて、植田老牧師の傍へ近寄り「お別れに悪

魔と握手してくれませんか！」

植田老牧師「サタンよ、退け？」と喝破して手を背後に廻す

潮金平「ハ、ハ、ハ、悪魔の手の血の循環を知つて置いた方が、お爲めだら

うにね、……貴方は？」と吉岡工學士に向ふ

(吉岡工學士、手を出したり、引込めたり)

吉岡工學士「ハイ……あの……私は……」

(潮、強く握りしめ)

潮金平「この後も亦、新しい會堂を建て、精々金をお儲けなさい、これは悪魔が貴方の耳に囁いて置きます、左様なら！」

鞠子「左様なら！」と父母と握手し、他の二人に向ひ「左様なら！」と云ひつゝ、潮の手を把つて扉に入る

○、動き廻り居たる植田老牧師

植田老牧師「實に見て居られん、見るに忍びん(咳きつゝ)神を失ふた牧師の家の腐敗墮落は實に言語道斷ぢや……最愛の娘、利子の聳はこんなものになつた(咳いて)最愛の孫の信一迄、神様の罰を受けて塔から落た、ア、己はヨブぢや……併しヨブの様に一時でも神様を咎めたり、怨んだりはせ

ん……唯自分の信仰が足らん……信仰の足らんのを謹む外は無さ」

(藤原、近寄つて)

藤原牧師「お父さん、貴方は昔のヨブで、私は今のヨブでせう、貴方は神を信じてなけりや生きてゐられませんか、私は神を信じないで、此から生きて行かうと思ひます」

植田老牧師「汝にお父さんと云はれるのは、何んだか自分迄が墮落するやうに思はれる、娘を接吻したり、悪魔と酒を飲んだり、今のヨブは勝手な真似をするもんぢや(咳いて)私はそんな人と同じ世界に住んでゐるのが耻かしら」

藤原牧師「正直に云へば、貴方と私とは同じ世界に住んでゐても、異つた空氣を呼吸して生きてゐるのでせう」

植田老牧師「然うぢや、汝は腐つた空気を吸つてゐるが、私は清い空気を吸つて生きてゐるんぢや」

藤原牧師「貴方の清いと思ふのは、山の上の稀薄な空気せう、私は地上の濃い空気を呼吸してゐます」

(植田老牧師、白髯を撫して)

植田老牧師「然うぢや、私は高い山の絶頂へ上つて行くんぢや、天國に近い處へ上つて行きよるんぢや、咳いて、汝は地の上へ降りて行く、地獄の底の方へ落ちて行きよるんぢや、もう救ひやうは無」

藤原牧師「天國でも地獄でも、貴方は貴方の足の向いた方へお出なさい、私は私の思ふ通りに行きませう、貴方は貴方の古い信仰を老人の杖にして突いて行くが善いでせう、私は若い者だから、自分の足丈依頼にして行

ける處まで行く考へです、もう議論はしますまい、神の名に依つてはなく、亡妻利子の名に依つて、又は死んだ信一の名に依つて握手しませう」

(植田老牧師、首を掉つて)

植田老牧師「神の御名に依てとは云へまい(咳いて)私の信仰は永遠より永遠に互る神の貴い賜物ぢや、舊くなつても舊びはせん、汝等の様を亡んで行く人間と握手する必要は無」

藤原牧師「貴方は最愛の娘を失ひ、孫を失ひ、便るべき息子には先立たれて今一人法師の身ぢやアありませんか?」

(植田老牧師、白髯を撫して)

植田老牧師「神、我と共に在るのぢや、一人法師でも些とも心淋しくはない」

兼子「此からも折々入らしつて下さいませんでせうか？」

植田老牧師「神から放れて墮落した人間の顔なんか見るのも忌ぢや、以後、

縁は切る、左様なら！吉岡さん、さア行きませう！」

吉岡工學士「然う一酷に仰しやらないでも善いでせう、お考へ直しなすつては？」

植田老牧師「君もそんな事を云ふのか？もうこんな家に用事はないぢやアな
いか(咳いて)君が行かんけりや僕一人でも行く」

吉岡工學士「でもまア、然う怒つてお歸りなさらなくても善いでせう」

植田老牧師「エ、君のやうな不決斷な人間は取るに足らん、己は歸る」と、

つと入る

吉岡工學士「老人は何うも困りますな、まア左様なら！いづれ又……」と入る

○後には二人

藤原牧師「汝と私との天地になつた、これから眞實の新生涯を始めなけりや

ならん」

兼子「前の新生涯が嘘だつた様に、今度の新生涯が又嘘にならなけりや善

いんですが、何んだか不安心ですね」

藤原牧師「まア行ける處まで行くんだ、静としてるんが一番不安心だ」

兼子「鞠子は何うなるんでせうか？」

(藤原、苦悶の色)

藤原牧師「成るやうに成るんだらう」

兼子「然うですね、成るやうに成る……成るやうにしか成らん、然う思ふ
と、これより他に、安心する途はないんですね」

藤原牧師『それを一つの新しい誠めにするんだ』

○お丸入来る

お丸『あの五人程、婦人の方が訪ねて見えました、救済會の事でお話かしたといふ事でございますが？』

兼子『五人程……何んな風の方だね？』

お丸『何んな風と申しまして……あの、皆、年齢の若い方で、顔の綺麗な人許りのやうです、女學生の人がその中に二三人も居りますやうです』

藤原牧師『然うか……それぢやア此處へ通つて貰ふか？』

兼子『でも貴方、まだ他にも後から来る人があるかも知れませんよ、此室ぢやア手狭ですから寧ろ會堂の方へ行つて貰つては何うでせう？』

藤原牧師『然う、十人も……その以上も、後から押駈けられても困るな……』

取り散らしては居るし、それぢやア然うするか？』

お丸『ぢやア會堂の方へと申しませうか？……(と、窓越しに、會堂の方を眺め)

アラ、彼方の教會の門口にも二三人、婦人の方が立つてゐられるやうでござりますよ』

(兼子も見て)

兼子『オヤ、成る程ね……ぢやア汝、然う云つて、皆さんを彼方の門の方へ御案内しといっておくれ、堂守は今、鞠子等を新橋へ送つて行た留守だから、會堂の戸は此方から行つて、直開けて上るよ』

お丸『ハイ、畏まりました』と退場

兼子『兎に角、困つてる婦人の方が随分多いと見えますね、鞠子の代りに、眞實の娘が見附かるかも知れません、それを私は楽しみにさせよう』

藤原牧師「汝は白い羊を選ぶ役になれ」

兼子「貴方は何うなさるんですか？」

藤原牧師「私は差當り黒い山羊を選ぶ番だ」

兼子「灰色の救済は止めるといふんでせうね？」

藤原牧師「それ丈は出来る、併し私は商賣人になれるか何うか、自分が疑は
し」

兼子「まあ早く、皆に逢つて見やうぢやアありませんか、貴方も行つて會堂
の戸口を開けてやらなけりやアありませんよ、さア参りませう！」

藤原牧師「會堂の戸口？……新しい會堂の戸口？」と頭を押へて「あの中に入
るのは何んだか怖い、何んだか怖い……活きた魔物の腹の中に呑込まれ
るやうだ、スフィンクスの中に入つて、私も永久スフィンクスのミイラ

になるのぢやアないか知ら？……皆も一緒に、スフィンクスの娘になる
のぢやアないか知ら？」

兼子「貴方、今更そんな事を云つてないで、早く、戸口を明けてやらなけ
りや、皆が戸の前に迷つて、何時までも入れないぢやアありませんか？」

(藤原、沈思の後)

藤原牧師「汝、明けてやつてくれ、私は後から行く、私の力には明かないか
ら汝行つて明けてやつてくれ」と、卓の抽出より鍵を取り出して、ガチャリと言させ
て、卓上に投出す

兼子「戸を明ける位に力は要ませんわ、貴方も早く後からお出なさいよ」と
入る。

(藤原、後見送つて)

藤原牧師「女は無造作にスフキングスの戸を開けるんだ」と静と暫く窓から凝視してゐたが、「……ア、開けた……開けた……皆、スフキングスの腹の中に入つて了つた、又出て来るか、何うか分らん……己はあんなに單純に行ない、ア、何うすれば善いか、何うしたら善いか？」と歩き廻り「己は海にも行けない、あの會堂の中にも入れない、スフキングス！己自身もスフキングスだ……ア、此處にスフキングスがゐるのだらう」と後頭を拳こぶしで打つたたつ（審）

牧師の家 終

明治三十四年四月廿七日
 明治三十四年四月廿七日
 明治三十四年四月廿七日

著者 中村吉藏
 東京市京橋區出雲町一番地
 發行者 野村鈴助
 東京市神田區表神保町四番地
 發行者 中山三郎
 東京市京橋區日吉町四番地
 印刷者 渡邊爲藏
 東京市京橋區日吉町十番地
 印刷所 民友社印刷所

發行所 發行所
 新橋 秋堂
 春 社

264
153

終

